

牡鹿に学びの場をつくるプロジェクト

2017年度 活動報告書

牡鹿に学びの場をつくるプロジェクトは宮城県石巻市牡鹿半島で地域の産業を活用して子どもたちの学びの場、ひいては地域のコミュニティーの再構築を目指して立ち上がりました。

子どもたちを取り巻く環境

少子高齢化、人口減少が進む中、東日本大震災により高台移転にかかる時間や生活スタイルの変化により地域外へ居住地を移さざるをえない住民も多く、小中学生に関しては震災から 7 年で半数以下に減少。牡鹿半島にある中学校 2 校、小学校 4 校の合計生徒数は 100 名程になり、子どもたちを取り巻く環境も大きく変わりました。

小中学生は学校までをスクールバスで通学、中学生はまだ部活動があるのでいいのですが小学生は放課後にグラウンドで遊んで帰るなどということはありません。

習い事も片道 1 時間程度をかけて石巻市内に通わせなくてはなりません。それができる家庭はいいのですが、仕事の関係で時間的にそれが難しい家庭もあります。

今後、子どもたちを取り巻く環境が良くなるという材料も乏しいのが現実です。

2017年度活動内容

学び場

中学生対象

週 2 回ペースで実施。(年間延べ 100 日)

基本各自の学習計画に合わせて、出来ない問題を解説するというスタイルで行う。

通常授業の他に模擬テスト、漢字検定、英語検定試験を実施。



小学生対象

週 1 回で実施

漢字検定試験の対策として小学生の時間を中学生の前に設定。検定試験後にも学習習慣を身につけさせたいとの要望があり、小学生コースを開設。

交流イベント(11月12日大原小学校)

東北大学グローバルセンター

留学生 40名と日本人学生 20名合計 60名と牡鹿地区の小中学生 15名の交流会。

日本の運動会でおなじみの大玉ころがし、玉入れ、綱引きを子どもたちと一緒に体験してもらった。

初めはぎこちなかった小中学生も競技のやり方を教えたりする中でうちとけていった。留学生も初めての競技に興奮して、大喜びだった。





イベントに合わせて小中学生一緒にバーベキュー&焼きそば



冬休みには宿題の書初めを学び場で実施。



普段通学バスでの移動で運動不足になりがちな小学生とボール遊び。違う小学校の生徒と遊べるのも学び場だからできる。



見学者が訪れ緊張気味。
たまにはいい刺激になります。



学び場は小学生も中学生も自分たちの机の準備、片付けは自分たちで行います。



検定試験に対して1か月前から受験級ごとに準備をして全員合格を目指しています。

ワカメ販売

運営費にあてるワカメ販売は売り上げにして100万円強、内訳としては個人販売が26万円、企業によるお歳暮、イベント景品として80万円。牡鹿地域を代表する産物であり扱いやすいということでプロジェクト商品の第一弾として採用。

しかし物販で運営費を捻出することは予想通り解決しなければならない問題も多い。

・年間を通しての販売では保管場所を年間通して確保することが難しい。

（生産者は3月中にワカメの刈り取りを終え、塩蔵したものは漁協を通して販売してしまうため。）

・ワカメを事前に確保するためには春先に購入資金が必要になること。

・ワカメは生産量や質により相場が変動するので、予定の利益を確保するのが難しいときもある。

・ワカメ単体では商品としての魅力に欠ける部分もある。（ワカメ自体がメインの食材でない為。）

・企業による大口の購入はとてもありがたいが、出荷の時期や在庫確保の調整が素人には難しい。などがあげられる。

運営費

本プロジェクトは地域の産物を販売しその利益を運営費に充てることで地域の子どもの育てる仕組み作りを目指しています。

平成 29 年度の収支は以下の通り。

平成29年度収支（平成30年3月末現在）

クラウドファンディング	¥872,400	ワカメ仕入	¥540,000
ワカメ団体購入	¥801,385	パッケージ制作	¥300,000
個人購入	¥266,352	包装材、送料	¥103,644
寄付	¥80,000	コピー機リース	¥60,000
		管理費(事務委託)	¥240,000
		ステッカー、備品、教材	¥97,442
		雑費(イベント等)	¥32,421
		講師謝礼交通費	¥646,630
収入合計	¥2,020,137	支出合計	¥2,020,137

成果

牡鹿の学び場は、少子化が進む中、地域の力で地域の子どもを育てる、環境を整備することが第一の目的である。学習においては場所と週2日ペースで実施できる形が作れたことが大きな成果であると考えます。そして中学生の父兄よりも小学生の父兄の方がこのような場所を必要としていることも感じる事ができた。

牡鹿半島内にある2中学校、4小学校を通して子どもや父兄に各種検定、イベントの情報提供ができる体制が整ってきたことも運営において大きな前進である。

子どもたちの学習面でもそれぞれの個性を大切にしながら学習へのモチベーションを保つという部分でも検定試験などを利用して近い目標設定をすることで成果が見られた。



課題

現在、牡鹿地区の小中学生は100名を割り込む人数で今後ますます減少することが考えられる。各小学校は全校生徒が10から20名(複式学級)、牡鹿中学校も3学年で30名となっている。子どもが少ない割に半島部はエリア面積が広く、子どもだけの移動は無理な地域もあり、基本車での移動になる。そこに誰でも気軽に参加できるという環境整備の足かせとなっている。特に夜間ともなれば親御さんに送迎をお願いしなければ通うことが困難となり、繁忙期などには送迎ができず欠席する子どももいる。

また全国学力調査で宮城県は全国平均を下回っている。その宮城県の中でも郡部や半島地域はさらに学力低下が指摘され、地域の小中学校でもその対策に頭を悩めている。個人の能力による部分も確かにあるが、半島部の子どもたちは学習環境の整備や学習機会のというところで劣っているということが大きな原因である。この問題の改善、解決のために学び場としてどう対応していくかということも重要になってくる。

次に場所の問題。現在会場として利用している大原浜生活センターが隣に建設中の建物が完成するととり壊しになる予定。そうなるとメインで使用してきた拠点が無くなる。次の対策が必要になってくる。またより多くの子どもたちが参加できるよう学び場の分散開催なども考えていく必要がある。

2018年度活動目標。

- ・学び場通常学習の充実(小学生・中学生)。
- ・小学生向けの体育教室(球技)。
- ・会場の安定確保と使用
- ・教育効果のあるイベントや集会の実施。
- ・物販による安定財源の確保。
- ・子どもたちの主体性のある学習やイベントの実施、サポート

(文責:伊東孝浩)